

心身障害児のルチン検査

—— 電気生理学的検査 ——

竹下研三 鳥取大学脳研神経小児科

目的：より簡便な手法で、測定条件に影響されにくく、解釈や比較できる情報量の多い検査法の確立をめざす。今年度はT波について検討する。

方法：新生児より16歳までの小児250名について、T波、M波、H波をとり、波形、潜時を比較し、かつT波の測定条件を検討する。

結果：(1) T波の波形は図1のように導出電極の位置によって様々に変化した。

(2) T波の波形は年齢の増加とともに、2・3相から5～7相になった。腱反射亢進例にはこの傾向が少なかった。

(3) T波の潜時は再現性がよく身長70 cm 以上では身長と相関した ($Y = 1.99 + 0.16 \times t, r = 0.969$)

まとめ：(1) T波は図1の(3)の位置でとり、その波形を記録し、潜時/身長の率を求めるのがよい。

(2) 年齢に応じて多相化しないときは錐体路障害を推測する。

(3) 潜時/身長の率が低い場合、末梢神経障害と錐体路障害を考えるが、両者の区別は末梢神経伝導速度によって行う。

